令和3(2021)年「正覚寺報」4月号

◆お 知 ら せ◆お 知 ら せ

漸く春本番であり、コロナも流行りやすい時期は過ぎました。用心深く、ご法座の都度、きちんとマスクをし、自ら管理し、大切なご法座は、共に心して営ませて戴きましょう。

尚、四月、仏壮お聴聞の会、仏婦例会は、住職出張所用の関係から日程を一日ずらせて戴きたく存じます。ご容赦を戴きたく存じます。

記

① **春の彼岸会(3月20日(日)14時、19時半～)**

② **仏壮お聴聞の会(4月3日(土)20時～)**

③ **仏教婦人会例会(4月17日(土)19時半)**

◆「大行釈＆称名破満釈」から

宗祖親鸞聖人のお聖教『教行信証』は生涯を掛けて拝読して参りましたが、この年になってお導きが深まり初めて気付かせて戴いた御文のお心には、驚きを隠せません。

それは、行巻の「**しかれば、名(みな)を称するに、よく衆生の一切の無明を破し、よく衆生の志願を満てたまふ。称名はすなはちこれ最勝真妙の正業なり。正業はすなはちこれ念仏なり。念仏はすなはちこれ南無阿弥陀佛なり。南無阿弥陀佛はすなはちこれ正念なりと,知るべしと(『称名破満釈』)**」であります。

「名を称する」とは、衆生が「南無阿弥陀佛とお称え申すことであり、衆生にはその力はなくとも、本願力回向の称名ですから称えることは、そのままお名号のお徳をお称(たた)え申し上げることになるのであります。お念仏をお称え申すことは、阿弥陀仏のお力により、よく一切の無明(煩悩)を破り、よく一切の志願を満たして下さるのであります。私が称えているように見えて、称え、ほめたたえる主体の本質は、如来様であります。「たまふ」とは、尊敬であり、如来様のお力を尊んだ意味だからであります。

すなはち、称名は、最勝真妙の正業(しょうごう)(ただしいおこない)であると仰せなのであります。

「正業はすなはちこれ念仏なり」とは、口称念仏するとき、衆生は、鸚鵡(オウム)か九官鳥のようにただ口先だけのお念仏をととなえているのではなしに、

① お称(とな)えすることがそのままお称(たた)えすることであり(第十七願)、

② 回向されているのですから称名の本質的主体は、阿弥陀様であり、

③ お称えすることは、心のなかに阿弥陀如来様そのお方を思い浮かべている(念仏=正念)ことになるのであります。

◆念仏はすなはちこれ南無阿弥陀佛なり」は、驚くべき一文であります。

口称念仏は、そのまま名号讃嘆であり、そのとき、衆生の心の中は如来様を思う心で一杯であることは、南無阿弥陀佛のお名号が働いていて下さる姿に他ありません。「南無阿弥陀佛なり」とは、阿弥陀如来がお名号となって働いていて下さるのですよ」と頂戴することになるのであります。称名破満釋で、信心獲得に到る道行きを繰り返し実践的に頂戴することこそ重要になるのであります。合掌。